

全能論の臨界点 - トマス・アキナスの哲学的神学

-

著者	小笠原 史樹
号	18
学位授与番号	235
URL	http://hdl.handle.net/10097/37023

おがさわら ふみ き 小 笠 原 史 樹

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 235 号
学位授与年月日	平成19年2月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学 位 論 文 題 目	全能論の臨界点 —トマス・アキナスの哲学的神学—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 清 水 哲 郎 教 授 野 家 啓 一 教 授 座小田 豊 助教授 直 江 清 隆 助教授 荻 原 理 助教授 戸 島 貴代志

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、トマス・アキナスの哲学的神学を考察対象として、神の全能性 (omnipotentia divina) に関する彼の諸理論を検討する。そして、そのような検討を通して、トマスの全能論が有する形而上学的な構造の特徴を剔出し、彼の全能論を「全能論の臨界点」へ至る理論として、全能性概念が失効する地点へ至る程の形而上学的な徹底性に即して把握することを試みる。

I. 現行の研究状況と問題点

本稿は、現行の三つの研究状況に基づく。

1. 注目すべきは、第一に、中世後期の全能論に関する諸研究の状況である。キリスト教哲学を検討するに際して、その範型は中世哲学の内に見出されるのが一般的であるが、神の全能性に関する中世哲学史研究としては、神の絶対的能力 (potentia Dei absoluta) と神の秩序付けられた能力 (potentia Dei ordinata) の二区分、即ち、絶対的な可能性を示す能力と現行の秩序に相対的な可能性を示す能力との二区分に関する概念史的研究が存在する。当該の研究は1920年代以降の蓄積を経て、近年 William J. Courtenay の *Capacity and Volition* (1990年) によって集約され、その他 Gijsbert van den Brink の *Almighty God* (1993年) や Lawrence Moonan の *Divine Power* (1994年) 等の成果を伴って、基本的な研究は半ば完成されるに至った (その他、Alanen、Pernoud、Randi、Oberman、Kennedy、Verdhuis、Schröcker 等の諸

研究を参照)。それらの諸研究によって哲学史的に解明されたのは、伝統的な全能性の概念がドゥンス・スコトゥスを契機として劇的に変化していく過程であるが、しかし、全能論に関する先行研究は、スコトゥスやオッカムを始めとする後期スコラ哲学の特異性を強調しすぎた結果、トマス等の理論を画一化する傾向があり、さらに、概念史的な方法論の制約上、概念の実際の用例のみを個別的に参照するに留まるが故に、神の能力の問題を意志との関係性や現実化如何に特化しがちであり、より全体的な文脈は看過されてしまっている。

2. 本稿は、第二に、中世後期の様相論理学に関する現行の研究状況を背景としている。当該の分野に関しては、1980年代以降の Simo Knuuttila や Jaakko Hintikka 等の研究によって古代中世の様相論理学史が更新され、ライプニッツ的な論理学の先駆形態としてスコトゥスの論理学が再評価され始めた、という状況がある。現時点の基本的な成果は Knuuttila の *Modalities in Medieval Philosophy* (1993年) 等によって確認され得るが、それらの生産的な諸研究は、しかし、全能論研究の場合と同様、スコトゥス論理学の革新性を強調しすぎた結果、トマスに代表されるようなスコトゥス以前の論理学を画一化・矮小化する傾向があり、加えて、論理学を主要な考察対象とする制約上、神学的・形而上学的な様相概念に関する考察は未だ徹底され得ず、より包括的な視点を示すには至っていない。

中世後期の全能論と様相論理学に関する上記の研究状況に即して、先行研究の問題点を解決する為に遂行されるべきは、スコトゥスの革新性・特異性の再検討であり、特にスコトゥス以前の全能論と様相論理学の再検討、即ち、トマスを典型例とする伝統的な諸理論の再検討である。また、全能論と様相論理学に関する両研究の乖離を調停すべく、より包括的な様相論を提示することが必要であり、個別の問題圏を総合する全体的な文脈を参照して、当該の様相論を位置付けることが求められる。

3. 本稿が基づく第三の研究状況は、現代の分析的宗教哲学である。近年の分析哲学の隆盛と対応して、分析哲学の方法を用いた宗教哲学が一大潮流を為しているが、そのような状況下、種々の神学的な諸問題が論理的に定式化され、論理学的な問題として考察される、という議論の傾向が見出される。その典型例が、神義論に関する Richard Swinburne や Alvin C. Plantinga の議論であり、さらに、Swinburne や Plantinga 以外にも、1969年の Nelson Pike の問題提起以来、神の全能性と完全性・善性等との整合性如何という観点から神義論を新しく定式化し、検討する試みが続いている（その他、Geach、Harrison、Gellman、Hoffman、Carter、Morris、Brümmer、Groarke、Morrison、Wielenberg、Metcalf 参照）。それらの諸議論は、可能世界論の枠組み等を用いた意欲的なものであり、新しい宗教哲学の可能性を示した点で高く評価され得るが、しかし、宗教的な諸命題の整合性如何という問題設定上、命題それ自体は単なる記号の集積として扱われるが故に、個々の宗教的な命題の内容に関する考察は不十分であり、哲学としての徹底性に欠けている。

分析的宗教哲学は、おそらくは方法論的な制約上、毎年発表され続ける膨大な研究量に反比例して、既に深刻な閉塞状況に陥っているように思われる。そのような閉塞状況を打破し、より徹底した宗教哲学を構築する為には、他の議論の方向性が模索されなければならない、そして、そのような方向性は中世哲学的な理論の内に、即ち、形而上学的方法論に基づく諸理論の内に見出される。故に、更なる議論の展開を試みるべく、論理学的な方法論に基づく現代の議論を中世哲学的な理論によって相対化し、転じて、中世哲学的な理論を一般的な議論へ還元し、宗教哲学の問題それ自体を考察する、という研究を行う必要がある。

以上の諸課題を確認した上で、本稿の考察が照準するのは、しかし、極めて限定された問題であり、即ち、トマス・アクィナスの全能論である（先行研究として、既述の文献に加えて、Eshmann、Devenish、McInerny、Torre 参照）。

本稿の考察は次のように進められる。

まず、予備的な考察として、ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』の全能論をアベラールとの関係性において検討し、トマスに先立つキリスト教的全能論の基本的な内容を確認する(第一章)。次に、本論の前半部として、トマスの全能論が有する形而上学的な構造を剔出すべく、『神学大全』第一部第二十五問第三項主文に対して註解的な考察を加え(第二章)、さらに、他の箇所を検討して理論の全体像を把握する(第三章)。以上の考察を踏まえた上で、本論の後半部として、神の能力の二区分を再検討すべく、「罪の不可能性」(Impeccability)に即して「神の絶対的能力」概念を分析し(第四章)、最後に、「神の秩序付けられた能力」概念と神の意志を巡る諸問題を考察する(第五章)。

Ⅱ. 本稿の考察成果

1. 第一章においては、本論への予備的な考察として、トマス以前の中世哲学的な全能論を提示すべく、ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』の全能論をアベラールとの関係性の下に考察した。

ロンバルドゥス『命題集』第一卷第四十二区分の議論は、「神は欲する事柄全てを為し得る」という規定によって、神の全能性を意志との関係性において規定しようとするものであり、「現実化しない可能性」に注目する先行研究の整理と異なって、可能性と現実性の一致を強調している(第一節)。さらに、後続する第四十三区分・第四十四区分とアベラールの全能論との関係もまた、従来の「必然性と偶然性の対立」という図式化を拒絶する枠組みを有しており、当該箇所の議論を単なるアベラール批判として整理することは不適切である(第二節・第三節)。敢えてアベラールとロンバルドゥスの論争を想定するならば、両者の本質的な対立点を、必然性と偶然性の相違ではなく、善に関する前提の相違に求めることも可能ではあるが(第四節)、しかし、トマスのアベラール批判が徹底的な排他性を持つのと対照的に(第五節)、ロンバルドゥス『命題集』の議論は宥和的な性格が強く、そのような議論を安易な対立構図の内に回収しようとする現行の整理は訂正されなければならない(第六節)。

2. 第二章と第三章が、本論の前半部である。

第二章においては、トマスの全能論が有する基本的な内容を確認すべく、『神学大全』第一部第二十五問第三項主文に対して註解的な考察を加えた。

トマスの『神学大全』当該箇所中、神の全能性に関する五つの規定が見出されるが、それらの諸規定を導出する論証は、「神は全てを為し得る」(Deus potest omnia)という第一の規定に関して、まず“omnia”を、事柄を記述する命題の無矛盾性に即して論理的に規定し(第一節)、次に“Deus”を参照して議論を存在論的な文脈へ移行させ(第二節)、論理的な可能性と存在論的な可能性を同時に示す規定として「神は矛盾を含まない事柄全てを為し得る」を結論する(第三節)、という仕方で進行している。トマスにおいて、神の全能性とは論理的可能性と実在的可能性の一致それ自体であり、彼の全能論は、様相論への射程を考慮するならば、スコトゥスの革新性を過度に強調する現行の整理を相対化するものとして機能することになる(第四節)。

3. 第三章においては、『神学大全』以外の諸著作を参照してトマスの全能論に関する考察を徹底し、その形而上学的な構造の特徴を「全能論の臨界点」として剔出した。

第二章において考察した『神学大全』当該箇所は、第二異論解答との関係上、「神は全てを為し得る」と「神は罪を犯し得ない」の整合性如何に関する問題を提起するものであるが(第一節)、そのような整合性は全能論の形而上学的な構造によって確保される。即ち、トマスの全能論は、ロンバルドゥス的な全能論の解体を経て、全能性の根拠を示すべく形而上学的に再構成されたものであり(第二節・第三節)、現行の宗教哲学的な諸議論に反して、罪の不可能性を帰結するような完全性・善性は、決して全能性の

範囲を制限するものではなく、むしろ、全能性の根拠である（第四節）。トマスにおいて、神は罪を犯し得ないが故に全能であり、全能性の論証可能性を否定するスコトゥスやオッカムと異なって、神の完全性・善性等を根拠として神の全能性が論証され得る。ロンバルドゥスや後期スコラ哲学の諸理論に比して、トマスの全能論は突出して形而上学的であり、もはや全能性を全能性と呼ぶことが意味を為さないような、そのような最高度の超越性に即して、「全能論の臨界点」において展開されている（第五節）。

4. 第四章と第五章が、本論の後半部である。

第四章においては、前章までの成果に即して、「神の絶対的能力」概念を形而上学的に再検討し、その更なる含意を示した。

神の絶対的能力は、実際の諸用例を参照する限り、未だ行為の現実化如何との関係性において把握されるに留まり、「秩序付けられていない能力」として消極的に規定されるにすぎないが（第一節）、神の能力それ自体を主題化する文脈を参照するならば、行為の現実化如何や結果の産出如何から独立な神の能力として、神の永遠なる働きを示す概念として積極的に規定され得る（第二節）。このとき、「神の絶対的能力」概念は、他の被造的な可能性を示すのみならず、被造物とは無関係な神の現実性を示すものであり、そのような二重性において理解されなければならない（第三節）。当該の二重性に即するならば、例えば「神は絶対的能力によって罪を犯し得ない」という主張も同様の二重性を有するものとして、第一に、意志の善性を根拠として、第二に、超越的な神の善性を根拠として導出される。神の善性は、被造的な全秩序の外部にある神それ自体に帰されるが故に、全能性の範囲を制限することはなく、むしろ、神の善性が世界によって全能性として制限される、と考えなければならない（第四節）。

5. 第五章においては、以上の考察を踏まえて、神の秩序付けられた能力と「神の罪の不可能性」（Divine Impeccability）の問題を主題化し、全能性の形而上学が有する射程を示した。

罪の不可能性の問題は、全能論の文脈において「神の絶対的能力」概念の問題として把握されるのが一般的であるが、条件的な可能性や神の意志の秩序措定的な性格を考慮するならば、「神の秩序付けられた能力」概念の問題として把握し直される（第一節）。即ち、「もし神が罪を犯すことを欲するならば、罪を犯し得る」という条件命題が真である限りにおいて、条件的な可能性の範囲は絶対的可能性の範囲を超過するのであり（第二節）、また、神の意志の行為それ自体が行為の規則である限りにおいて、罪の不可能性は実質的な意味を失い、無内容化する（第三節）。以上の枠組みに即するならば、存在論的な構造上、罪の問題は付随的・二次的なものとして半ば解消され、神義論は、神の善性と世界の悪とを神の全能性が媒介する、という構造を持つものとして再構成され得ることになる（第四節）。

要約的に述べるならば、本稿の考察成果は、神の完全性・善性と全能性の関係について、従来の整理や現行の諸議論が「神の完全性・善性が全能性の範囲を制限する」という前提に基づくのに反して、全能論の臨界点へ至るトマスの哲学的神学においては、逆に「神の完全性・善性は全能性の根拠であり、神の全能性は完全性・善性の制限形態である」という構図が見出される、という知見へ集約され得る。神の実体に関する諸規定、単純性・完全性・善性・無限性等は、第三章において結論された通り、“Deus potest omnia”という事態に関して、“potest”の対象の範囲を制限することはなく、むしろ、“potest omnia”が成立する根拠である。また、第四章において結論された通り、善性が全能性を制限することはなく、むしろ、神の善性が世界との関係性によって全能性として制限されるのであり、即ち、“potest omnia”が付加されるならば、“Deus”は世界との関係性の内に制限されることになる。以上のような事態が、形而上学的に構造化されたトマス全能論の最も重要な帰結であり、「全能論の臨界点」とは、全能性の根拠を問うことによって、究極的には神の実体を参照するに至ること、結果如何から独立な働きとして能力を把握するに至ることであり、即ち、働きの対象との関係性を必要とするはずの「能力」概念が当該の関係性を必要

としなくなるような、目的語を必要とするはずの“potest”という表現が目的語を必要としなくなるような、従って、全能性を全能性と呼ぶことが意味を失うような地点、全能性が或る制限として機能するに至るような、そのような地点のことである。

トマス・アクィナスの全能論に関する上記の諸知見に加えて、本稿の更なる成果として特筆されるべきは、第一に、哲学史的な成果として、十二世紀から十四世紀へ至る中世後期の全能論に関して、その展開を「トマス的な全能性の形而上学の成立と解体」として整理する発想が得られた、という点である。第一章・第二章・第三章の考察は、当該の発想を得るべく費やされた。ロンバルドゥスは決して到達し得ず、そして、スコトゥスやオッカムは到達を拒絶した地点、その形而上学的高みこそが、トマスが到達し得た、おそらくはトマスのみが到達し得た全能論の極、全能論の臨界点である。トマスにおいて、神の全能性は自然理性の対象たり得、論証され得たのであり、そして、存在論的な構造化の下、全能論は高度な形而上学として展開され得た。トマスにおいてのみ神の全能性は、「為し得る」対象から独立な神の能力それ自体の領域において、もはや全能性を全能性と呼ぶことが意味を為さないような、そのような最高度の超越性として把握され得た。前後の諸理論に比して、トマスの全能論が突出して形而上学的であり、トマス前からトマスへ、トマスからトマス後へ、という展開が、神に関する高度な形而上学の成立と解体、換言すれば、高度な哲学的神学の成立と解体として描写され得る、ということは、中世後期の哲学や神学を概観するに際して、有効な準拠枠として機能すると考えられる。

第二に、第四章・第五章の考察によって、同じく哲学史的な成果として、神の絶対的能力と神の秩序付けられた能力の二区分を巡る諸問題に関して、それらを形而上学的に検討する枠組みが得られた、という点が挙げられる。例えば「神は絶対的能力によって罪を犯し得るか」という問いに関して見出されるような、神の超越性と内在性を問いの重層性において同時に主題化する枠組みこそが、トマス・アクィナスの哲学的神学が有する基本的な構造であり、種々の神学的問題は当該の構造に即して再検討され得る。この点、特に現在進行中の後期スコラ哲学の全能論研究に対して、本稿の整理は有効な概念装置として機能するように思われる。

そして、第三に、宗教哲学的な成果として、あくまでも試論的ではあるが、神義論を再構成する方途が得られた、という点もまた、第五章における考察の成果である。神の全能性が実体としての善性を根拠とすると同時に、善性の制限形態として世界と関係し、悪と間接的に結びつく、という二重性、全能性が有する媒介としての性格が、トマスの全能論が示す神義論への射程である。神の善性と世界の悪は全能性によって媒介され、世界は絶対的に肯定される。ただし、更なる宗教哲学的な議論は本稿の課題を著しく超過するものであり、当該の成果は付随的なものにすぎない。

十二世紀思想と後期スコラ哲学に関する議論が未だ不十分であり、構想的なものに留まっている点、また、歴史研究を離れた哲学研究としての議論が必ずしも徹底されていない点は、本稿の問題点として指摘しておく必要がある。中世後期の全能論に関する全体像を把握する為には、より網羅的な研究を遂行しなければならない。しかし、少なくともトマスの全能論それ自体に関する研究としては、本稿の考察において、解釈上の重要な諸問題は主題化され、それらの問題に対する最終的な解答が既に与えられている。その限りにおいて、本稿は中世哲学研究上の限定的な一成果としては機能し得るのであり、もし当該の成果が更なる中世哲学史研究や哲学研究に対して、或いは、両者を総合する新しい「中世哲学研究」に対して幾許か寄与し得るならば、本稿の課題は果たされているように思われる。

論文審査結果の要旨

本論文は、13世紀西欧の哲学者・神学者トマス・アクィナスにおける、神の全能性をめぐる思索を分析し、その論がもつ徹底的に形而上学的な特徴を指摘するものである。本論文の中心的主張は、神が全能であることと、罪を犯し得ないことが如何に整合的であり得るかという問題に関して、トマスにおいては、世界との関係性を超越した神の完全性・善性が全能性の根拠となるという構造を見出し、その根拠の場面を、全能性を全能性と呼ぶことが意味をなさなくなるという意味で「全能論の臨界点」として提示するところにある。この論点を核として、本論文は、西欧中世の全能論および様相論理学をめぐる先行諸研究に対して修正を迫り、また、分析的宗教哲学における現在の諸議論に対して、より徹底した形而上学的な探求の有効性を訴えるものとなっている。

本論文は本論5章および付論からなっている。

第一章(アベラールとロンバルドゥス)においては、本論への予備的考察として、トマス以前の全能論を提示すべく、ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』の全能論を分析し、これを先行する思想家アベラールの理論と比較検討している。すなわち、ロンバルドゥスは「神は欲する事柄全てを為し得る」として、神の全能性を意志との関係において規定しており、「現実化しない可能性」に注目する先行研究に反して、可能性と現実性の一致を強調している。また、ロンバルドゥスとアベラールとの関係も、従来の「必然性と偶然性の対立」という図式で捉えることには無理がある。トマスはアベラールを批判して排除するが、ロンバルドゥス『命題集』の議論は宥和的な性格が強い。

第二章(*Summa Theologiae*, I, d.25, a.3, c.)においては、トマス『神学大全』第1部第25問第3項主文を分析、検討することを通して、トマス全能論の基本的な性格を割り出している。すなわち、神の全能性の規定を導出するに際して、トマスは「神は全てを為し得る」という規定について、まず「全て」の内実を、事柄を規定する記述の無矛盾性に即して論理的に説明し、次に「神」に目を向けて議論を存在論的なものへ移行させ、その上で論理的な可能性と存在論的な可能性を同時に示す規定として「神は矛盾を含まない事柄全てを為し得る」を結論するという過程を辿っていることを指摘している。さらに、トマスにおいては論理的可能性と実在的可能性の一致として全能論が構成されていることから、現行の諸研究における、後代のドゥンス・スコトゥスの革新性を強調する傾向に対して修正を迫っている。

第三章(全能性の形而上学)においては、第二章の成果を基礎に、トマスの他の諸著作を参照しつつ、トマス全能論の分析を進め、その形而上学的な構造の特徴を「全能論の臨界点」として提示している。すなわち、「神は全てを為し得る」と「神は罪を犯し得ない」との整合性は、トマス理論の形而上学的な構造によって確保されるのであり、罪の不可能性を帰結するような神の完全性・善性は、全能の範囲を制限するものではなく、むしろ全能性の根拠である—神は罪を犯し得ないが故に全能である—ことを論証し、全能性の根拠の場面においてはもはや全能性を語るが無意味であるとして、これを「全能論の臨界点」として提示している。以上の考察を踏まえ、後代のスコトゥスやオッカムが全能性は論証不可能であると主張するのに対して、トマスは神のあり方を根拠に全能性を論証する立場にたっており、先行するロンバルドゥスおよび後代の諸思想家と比して、突出して形而上学的であると評価している。

第四章(神の絶対的能力)においては、前章までの成果を踏まえて、「神の絶対的能力」概念を形而上学的に再検討している。すなわち、神の絶対的能力は行為の現実化との関係においては、「秩序付けられてない能力」として消極的に規定されるに過ぎないが、神の能力それ自体としては、神の永遠なる働

きを示すものとして、積極的に規定される。こうして、「神の絶対的能力」概念は、被造の可能性とともに、それとは無関係な神の現実性を示すという二重性において把握され、これに対応して「神は絶対的能力によって罪を犯し得ない」も二重の仕方でも導出される。ここから、神の善性は全能性の範囲を制限するのではなく、神の善性が世界によって全能性として制限されると考えるべきだと結論する。

第五章 (Divine Impeccability) においては、「神の秩序付けられた能力」と「神における罪の不可能性」を主題とし、全能性の形而上学の射程を示している。「神が罪を犯すことを欲するならば、罪を犯し得る」をトマスは真としており、ここで条件的可能性の範囲は現行の秩序下の可能性と絶対的可能性の範囲を超えている。が、「神が罪を犯すことを欲する」という条件が現実となることが不可能なことは、神の意志の働きが秩序措定的なものであって、何を欲するとしても秩序から逸脱することはない(すなわち罪を犯すことにはなり得ない)として、罪の不可能性を無内容化した仕方でも確認される。このような理解を踏まえて、本論文は、トマスの神義論の基本的構造の提示を試み、神の善性と世界の悪とを神の全能性が媒介するという構造をもつものとして再構成され得るとしている。

付論(ダミアヌスの全能論とトマス・アクィナス)においては、西欧中世の全能論をさらに遡って、「神は欲するならば、為し得る」ということをめぐる11世紀のペトルス・ダミアヌスの考え方をとりあげ、これとトマスの理解と比較している。

以上、本論文の核心は、従来の諸議論が「神の完全性・善性が全能性の範囲を制限する」という考え方をしているのに対し、トマスの形而上学的思索においては「神の完全性・善性は全能性の根拠であり、神の全能性は、完全性・善性の制限形態である」とされていることを見出したところにあり、この立論は相当程度説得的であり、検討に値する。ここから本論文はさらに神義論などの問題を再検討しており、トマスの全能論の射程を明らかにする作業に対して、重要な布石をしたものと認められる。

トマスの理論についてのこのような把握に立脚して、本論文は、12世紀から14世紀に至る中世哲学・神学における全能論の展開を、「トマスの全能性の形而上学の成立と解体」として把握する可能性を示したという成果をあげてもいい。すなわち、トマスに先立つロンバルドゥスは到達せず、トマス以降のスコトゥスやオッカムはそこへの道行きを拒否した、形而上学的高みとして、全能論の臨界点が位置づけられている。

以上は、現在の中世哲学史研究において、全能性についての伝統的概念がスコトゥスにおいて劇的に変化するという把握がなされているという研究状況に対して、見直しを迫る点である。また、中世後期の様相論理学史においても、スコトゥスの様相概念の革新性を強調する傾向があることに対する疑義を提示するという意義もある。

分析的な宗教哲学の領域に関しては、本論文は、現代的神義論の状況に対して、トマスの全能論が示す神義論の再検討を提案するという意義を持つと思われるが、この点を具体的に展開することは今後の課題といえよう。

以上のように、本論文は、具体的で、オリジナルな成果を多く含んでおり、それらは今後大いに展開する可能性があるという点で、斯学の発展に大いに寄与すると評価できる。

よって本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。